

グローバル化する若者文化（3）地元志向の現在

中央大学 辻 泉

1. 目的

本報告の目的は、2005・2009・2015年にわたって、地方都市（愛媛県松山市を事例とする）と大都市（同様に東京都杉並区）の比較を目的に行われた実証的な質問紙調査の結果に基づき、若者たちの地元志向の実態について考察することである。

グローバル化と平行にローカル化の進展する今日の社会では、とりわけ地方都市における若者たちの地元志向といわれる傾向が注目を集めており、彼らの生活満足度や地域愛着度は高い傾向にある。

たとえば、本報告で取り上げる調査においても、「現在の生活に満足している」という項目に対して肯定的な回答をしたものの割合は、松山市で54.7%→65.9%→72.8%、杉並区でも60.2%→70.8%→76.4%（いずれも2005年→2009年→2015年、以下同様）といずれも増加傾向にあり、それぞれの年においても、地域差は見られなかった。

同様に、「今、住んでいるまちが好きだ」という項目に対しても、松山市で79.4%→88.8%→83.2%、杉並区で83.0%→89.9%→87.6%と高い水準で安定し、やはり地域差が見られなかった。

かつてのように、大都市に憧れる上京志向は、もはや多数ではないが、では若者たちが地方都市に満足し愛着を持つとはいかなることなのか。

本報告では、若者の地元志向に関するいくつかの先行研究をレビューしながら、さらに実証的な質問紙調査の結果と解釈に基づいて、その実態を明らかにしていく。

2. 分析方法

調査全体の概要については、本部会の第一報告の通りであるので、ここでは本報告に関連する部分のみを記しておく。本報告が主に用いるのは、地域愛着度に関する質問項目である。これに関する項目を従属変数として、基本属性や、個人性、対人性、社会領域の広範にわたる項目を独立変数に投入し、その規定要因を探ることとする。

また、地方都市の現状を中心に、大都市や、地方都市の過去の状況も適宜、比較対象として分析を深めていくこととする。

3. 結果

地方都市の地元志向について、主要な先行研究（阿部 2013、貞包 2015、三浦 2004 など）が指摘していた、画一化された消費行動やメディア利用に関する変数との関連が示唆された点、およびそうした規定要因が大都市とは異なっていたという点は、興味深い知見といえる。当日はさらに詳細な検討を行う予定である。

<主要参考文献>

阿部真大, 2013, 『地方にこもる若者たち—都会と田舎の間に出現した新しい社会』朝日新聞出版.

貞包英之, 2015, 『地方都市を考える—「消費社会」の先端から』花伝社.

辻泉, 2010, 「地方の若者・都市の若者—愛媛県松山市・東京都杉並区2地点比較調査の結果から」『松山大学論集』松山大学総合研究所, 22[1]: 443-465.

三浦展, 2004, 『ファスト風土化する日本』洋泉社.